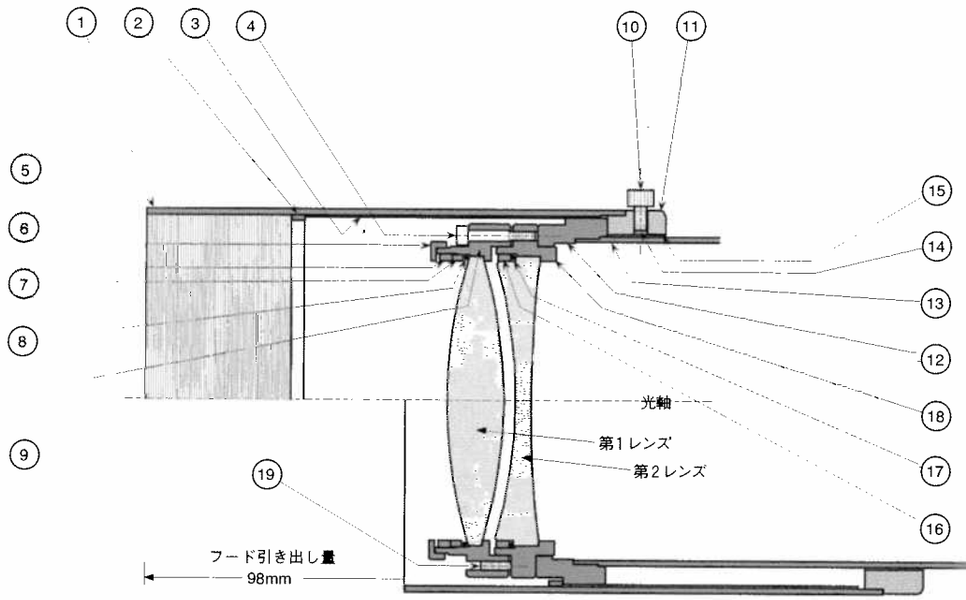

図19　光学系前部，引き出し式フードの構造図

第1レンズはセル(9)に収め，Oリング(8)，押さえ環(7)，締め付け環(6)で固定し，その前方に化粧環(5)をねじ込んである．第2レンズはセル(18)に収め，Oリング(17)，締め付け環(16)で固定してある．2つのセルは3対の引きネジ(4)と押しネジ(19)による間隔調整装置を設けてある（自分では決してさわらないこと！）．第1第2レンズセルは一体でトップリング(12)にねじ込んで固定してある．

対物フード(1)は鏡筒(13)に沿って前後する摺動環(11)にねじ込んである．摺動環(11)はネジ(10)で固定する．環(2)は対物フードを押し込んだ位置のストッパーである．対物フードの内側には防傷とスムーズな摺動を案内するためにシート材(3)が貼ってある．対物フードの引き出し量は98mmである．

第3，第4レンズは図20を参照してほしい．鏡筒後部リング(21)から内筒を伸ばして組み立てている．

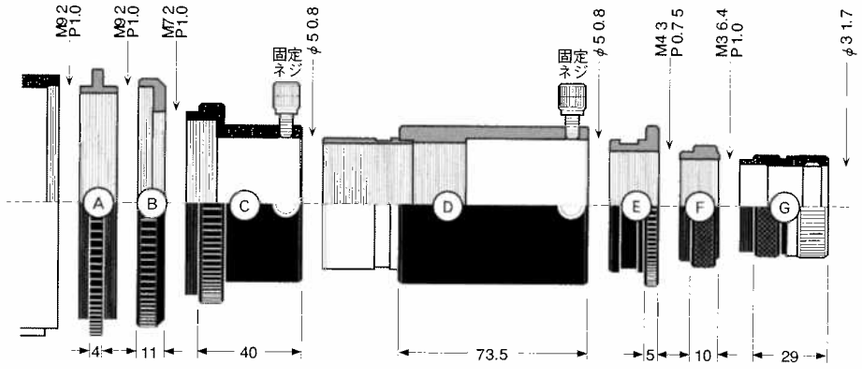

図18　接眼部のアクセサリーの取り付け寸法規格

接眼部は，ドローチューブ末端のM92mmねじをベースとして，

A；接眼アダプター接続環　B；2種アダプター　C；50.8アダプター
D；50.8延長筒L　E；50.8スリーブ　F；接続環（短）
G；アイピースアダプター

の順に構成されている．50.8mm（2 inch）径スリーブのアイピースは，Dの後方に直接差し込むか，別売の天頂ミラー（KA 00543）をCの後方に介して取り付ける．

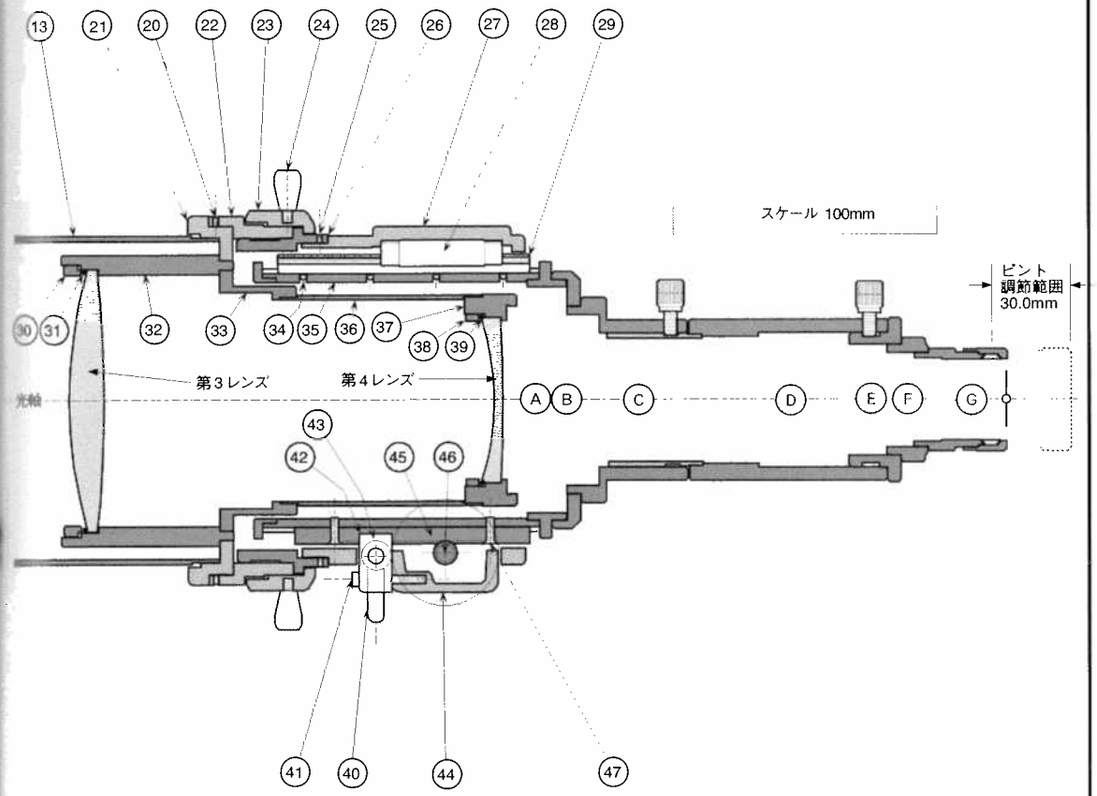

図20　接眼部とピント装置

ドローチューブ(35)は，接眼体(27)に取り付けた直動案内装置(28)(29)で支持している．(28)は鋼球が循環する支持部で，(29)はレールである．これによってドローチューブは移動する前後方向以外の動きを全て拘束されスムーズに稼動する．デルリン(59)はそれを与圧するもので，クランプフリーでのフリクションを調整するとともに，ドローチューブの安定支持の役割も担う．

ドローチューブ(35)はラック(45)＆ピニオン(46)で前後に摺動する．操作は合焦ノブ(48)で行なう．右図では省略されているが，右側のハンドルには，減速比1:7の同軸二重微動装置MEFが組み込まれている．MEFはサンギヤやプラネタリーギヤを使った歯車式ではなく，鋼球を使ったものである．バックラッシュがないかわりに，強い負荷がかかるとスリップすることがある．ピニオンシャフト(48)はベアリング(52)で支持され，(51)はその締め付け環である．つまり本機のピント装置はすべて転がり軸受けで支持されいることになり，旧モデルと比較すると一段と精密さを増している．

(43)はドローチューブのクランプ装置で，レバー(55)を操作すると，ラック(45)の側面を挟み込むようになっており，操作によって視準がズレないようになっている．

接眼部基部の(22)(23)(26)は接眼部全体のレボルビング装置である．

